Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	<新刊紹介>パリ法科大學教授ノガロー原著小樽高等商業學校教授手塚嘉郎著「國際貿易に於ける貨幣の職分と貨幣數量説」
著者 Author(s)	福田, 敬太郎
掲載誌・巻号・ページ Citation	經濟學商業學國民經濟雜誌,37(5):809-811
刊行日 Issue date	1924-11
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/00053704

Create Date: 2017-12-18

パリ法科大學教授ノガロー原著
小樽高等商業學校教授手塚壽郎著

國際貿易に於ける貨幣の職分と貨幣數量說

四六版　二六九頁　同文館發兌　定價貳圓參拾錢

ささにゴッセン研究を公刊せられ目下フランスに遊學中なる小樽高等商業學校教授手塚壽郎氏はここにその師パリ法科大學教授ベルトラン・ノガロー氏の學位論文 Le rôle de la monnaie dans le commerce international et la théorie quantitative, 1904 を邦譯してノガロー氏を我國に紹介せられた。ノガロー氏は「年四十を幾何も超えない、そして其將來に於ける學問的產物を多大の注目をもつて期待せられつつある小壯教授であり、」「現今に於ける佛蘭西經濟學の主流を成す現實派の闘將である。」彼が「既に生產せる幾多の著書と論文とは概ね經濟學上の純理論に關し、其分析に於ける理論の嚴正と批評の鋭利とを以て普く知られ」てゐると云ふ。譯者手塚氏は敢てこの學位論文の「價値如何に就て一言も言はず、」讀者が熟讀沈思することによつて「自らそれを判斷せらるべきである」と告げてゐる。私は頃日多大の興味をもつてこれを精讀し大いに啓發せらるるところあり、ここに簡單なる紹介文を書く。

この論文は第一章序論から第九章結論に至るまで全編九章から成り立つてゐて、全體の論旨はミルの國際價値論とリカルドの國際的貨幣水準說とを批評しこれを否定するに在る。實に現實派の闘將が原論派（假りにかく呼ぶ）の巨頭に對する挑戰狀としてこれほど美事なるものはあるまい。

金屬貨幣の國際的分布は物々交換の行はるる時代に生ずべき自然的物財流動關係に應ずるやう行はるると云ふリカルドの思想を證明するため、ミルは國際貿易が實際に物々交換の形式の下に行は

るものと假定し、その論證を展開して結局、貨幣制の下においても物々交換の下においても本質的に何等の變化なきことを斷定した。これに對してノガロー氏は反駁する。曰く、第一にミルは商品は必然的に相互に支拂はねばならぬものと假定してゐるが、然し現實に於て此必要と云ふことは存在しない。第二にたとひ輸入と輸出とが均衡する傾向を有すと證明せられたとするも、そのことから國際價値の理論を引き出し得ない。結局ミルの議論は「原理の單純なる繰返し」である、と。かくて第三章においてミルの國際價値論を詳細に分析し批評して、その結語に曰く、「故に交換のメカニズムに於てでなく、交換の根本的條件の上にリカルドの理論を築き以て之に一層廣汎な基礎を與へむとしたミルの一切の努力は徒勞である、」（譯書一〇〇頁）と。

そこでノガロー氏は遡つてリカルドに歸り貨幣の導入から國際貿易の均衡が自働的に生じ得るか否かを檢する。これを分解すれば、

一、貿易差額と金屬貨幣の運動（第五章の問題）

二、金屬貨幣の運動と物價の運動（第六章の問題）

三、物價と對外貿易（第七章の問題）

との間に存する三個の繼起的關係が觀察によつて實證せらるるか否かを檢するのである。而してノガロー氏はそのいづれにおいてもリカルドが提唱したやうな自働的均衡作用は現實に發見し得ないことを我々に告げてゐる。第一に曰く、「貴金屬を國際貿易に於て用ひらるる唯一の貨幣なりと考ふるは重大なる誤謬を生ずる。貿易差額の狀態は必然的に貨幣の運動を生ぜしむるものではない。それは性質の相異したそして國民經濟の上に異つた作用をもつ貨幣的用具の使用を惹き起す、」（譯書一五六頁）と。ここに國際貨幣としての有價證券の職能が考察せらるる。第二に曰く、「他の要因が物價に及ぼ

す作用を考ふることなく且つ數理說が貨幣の存在量に與ふる作用を許容するとも、事實に於て貨幣の存在量と物價との關係は複雜に過ぎ不確實に過ぎ、リカルドの理論の如き單純な概念となし難い、」(譯書二〇一頁)と。而して第三に、「物價の變動に後行する輸出又は輸入の合計が之に先行する輸出又は輸入の合計より多いか又は等しいかを知るは不可能である、」(譯書二〇七頁)「故に物價の變動と對外貿易との間にはリカルド國際貿易理論が含む必然的關係はないのである、」(譯書二〇九頁)と結論した。

かくしてノガロー氏は國際貿易の複雜なる現象を交換の一般的性質またはその行はるる機構のみを考ふることによつて說明し得たりとする概念が不正確なることを論證した。氏によればミルは現實と非現實とを同化し、彼の後に出でたる多數の追隨者は「理論經濟學を組織したるに非ずして、非現實的經濟學を組織せるものである」。(譯書二六六頁)その言や實に壯なりと言ふべしである。

私はノガロー氏のこの論文に含まれてゐる貿易論乃至貨幣論は氏の體系中の一部分に過ぎないことを信ずる。從つて氏の主著「經濟學概論」が遠からざる將來において同じ譯者によつて日本に紹介せらるる機會を見出すことを聞いて喜びに堪えぬ。また氏が既に公にせる貨幣および物價に關する若干の論文を綜合し、その基礎の上に一書を著はすことを企てつつあることを聞いて、手塚氏と共にその出版の一日も速かならんことを望むものである。

なほ手塚氏の翻譯については原本を所持しない私として言葉を挿む權利が無いが、若干のミスプリントを除いて意味不明の個所は見當らなかつたことを告白する。たゞ第五章の半ば以後に屢々現はるるところの恐らくは Arbitrage の譯語なりと思はるる「裁定」(例へば譯書一五一頁)と言ふ語は「鞘取取引」とする方が適切であると信ずる。終りに當つて遙かに譯者の健在を祈る。(福田敬太郎)